大きな大きな窓の向こうで常時に大海が荒れ狂う。遥か高くで空を覆い尽くす雲の中では雷が暴れている。音は届かない。光だけが見える。

秘匿惑星ヴィバーナの気候状態はそのようなもので一年中固定されている。その星に立ち寄るものは混沌勢の幹部でもごく僅かで、住むのは管理を任されているヴィーゾ星人の生き残りと、紆余曲折あってヴィーゾ星人に育てられた人間の女の、たったふたりだった。

その人間の女――ルミェ・ドゥは窓の外に広がる気候だけを、実体の伴う気候として知っている。つまるところ、彼女は「晴れ」も「太陽」も「虹」も「青空」も、知らなかった。知りたいとは常日頃思っていたが、彼女は育ての親への恩を捨てる気にはひとつまみも思わなかった。育ての親は彼女に好きに生きることを薦めてすらいたが、頭が縦に振られることはなかった。

ヴィバーナの存在を知るのは混沌勢の幹部のみのため、護衛や守護を目的とした兵が配置されることはなかった。無いものはそもそも認識されず、探されもしないからだ。

しかしある日、旧式の機体が秘匿惑星にやってきた。

ヴィーゾ星人と少女は初めてかつ想定外の出来事に、その機体がどうにかこうにか着陸するのをただただ見守ることしかできなかった。

「パパ……」

不満げにそうこぼす娘を前に、父は気丈なふりをしてその身体を後ろに隠すように前に出た。

「大丈夫だ」

機体のハッチがゆっくりと開く。機体は煙を吐き、バチバチと音を鳴らしている。今にも爆発しそうな勢いだった。が、操縦者は姿を現さなかった。

「……？」

ヴィーゾ星人は機体に近づき、浮遊して操縦席を覗き込む。

「ひとだ」

中には肩を血で濡らした人間がいた。宇宙服で全身が隠れているために顔も性別もわからなかったが、宇宙服の規格が人間のそれだった。

「ヒト……？」

ルミェは自分以外の人間を見たことがなかった。初めての存在に恐怖はなく、とても強い興味が顔に現れた。父は娘の機微に敏感だった。

「ああ、人間だ」

ヴィーゾ星人は意識を失っているらしい人間の怪我を一瞬で治し、身体を浮かせて少女の前にまで持って行った。父は別れを感じながらも、それをおくびにも出さなかった。

娘は好奇心の虜になっている。

義理の父は、本当の父の顔を思い浮かべた途端に叫びたくなったが、我慢した。